

一般入学試験〈I期〉・給費生入学試験

○問題一 次の文章は「自然哲学」について論じた文章の前半の一節です。読んで後の問に答えなさい。

果して自然哲学とは自然の構造や歴史を研究する学問なのであろうか。そんなものは自然科学にまかせておけばよいのではないか。自然哲学はそれらとは別の世界を研究する学問であるはずだ。私にはつねにそういう意識があった。

それはおそらく私の経験からきている発想でもあった。いま考えてみると私は自然について考えるとき、二つの回路のなかで思考をすすめてきたように思う。そのひとつは自然科学的な自然へのアプローチ、そうしてもうひとつは川釣りをバイカイに経験してきた私自身の山村での日々のなかから教えられた自然認識である。だから私は、たとえばエピクロス注の次のような表現が好きだった。「全体の自然は物体と空虚とである」

この自然認識はギリシャ・ローマ時代の哲学のなかでも特異なものである。〈自然は物体である〉と言うとき、そこにあるものは、エピクロスにとっての自然科学的な自然像である。(A)それは全体としての自然の半分の面ではない、もうひとつ〈空虚としての自然〉がある、そして全体としての自然は、この二つの自然が重なり合うなかで成立しているのだ。そこにエピクロスの自然認識がある。

自然科学的にとらえられた自然、それは人間の外に客観的に実在している自然である。だがそれが自然のすべてではない。もうひとつ人間の主体と関係を結ぶことによって成立している自然がある。この後者の自然をエピクロスは〈空虚としての自然〉と表現した。

私もまた一面では自然科学的に自然をみてきた。しかしその一方で釣りをし山村を歩くことによって、即ち自己の主体との関係のなかで自然をみてきた。(B)私は後者の自然を〈空虚としての自然〉というようににとらえない。のちに私はこの自然を、コウギの労働をバイカイにして人間と関係を結んだ自然としてとらえていくことになるだろう。

思い出してみると私は子供の頃から釣り竿を持って幾度となく山村の川を歩いてきた。東京生まれの私にとって山村の自然はつねに子供の頃の憧れだった。(C)二十歳を過ぎた頃からは山女やまめや岩魚いわなを追って山村に滞在し、ちよつとしたきっかけから山の傾斜地の畑を借りることになった。いまでも一年のうち一、二月は山村を訪れている。

その釣り紀行のなかで私は自然についていろいろなことを学んだ。山の動物、植物、気象、そういった自然科学的なこともこのなかには含まれる。しかしそれだけであつたわけではない。

ある日川岸を歩いていて、私は自分の釣りに急に息苦しさを感じた日があつた。シユンビン注な魚である山女や岩魚の釣りは、できるだけ人影を隠して魚のいそうなポイントを探るように釣り歩いていく。そのポイントは季節によつても、時間によつても、天候やエサになる虫の発生状況によつても異なつてくる。満足に魚を手にするができるようになるには、結構ネンキがある。その結果山女や岩魚の釣りには数多くの釣り方のマニュアルが生まれている。仕掛のつくり方、ポイントの選び方、エサのつけ方、アワセの方法……。

私が息苦しさを感じたのは、私自身が頭のなかにつめこまれた釣りのマニュアルに忠実であるように気を使って釣りをしていたことに気付いたときだった。考えてみれば私は職漁師ではないのだ。釣りは釣り竿をバイカイにして川の自然と交流する行為なのであつて、その交流の仕方は自由であるはずなのだ。ところが自分自身、そうしなければいけないとでもいうように、釣りのマニュアルに気を使つている。(D)私は遊びのなかでさえ、自然と人間のマニュアル化された交流の仕方にシユウソク注してしまつていたということになる。

私の釣り方がとにかくに自己流になつていったのはそれからだった。ほとんどは失敗ではあつたが気のむくままにどんな改良でも試みた。魚がエサをくわえても、そのエサを魚がどんなふうにも処理するかをみていたりして、うまくエサを鉤からはずしていくと私も嬉しくなつた。

そんなことをしているうちに、私はようやく釣りにマニュアルはいらぬことを経験的に知るようになった。釣りとはいかに釣竿をバイカイにして、人間が川の自然と交流するところから成立する。だから川の自然と、そしてそのなかで暮らす魚たちと呼吸が合えば、どんな道具を使おうとも、どんな方法であらうとも魚は釣れる。私はよう

やく川のなかには魚たちの暮す「小宇宙」ということを理解するようになった。

川のなかには川の変化をたくみに利用して暮す魚たちがいる。魚は自然を利用しながらまた自然の一員である。この川のなかの大なる自然の世界が、それまでの私にはみえなかった。なぜ、それは釣りのマニュアルにしたがうことよって、自然と人間のマニュアル化された交流のなかに私自身がいたからだ。あるいは自然と技術的に交流していたからである。(E) 私には、そのマニュアル、技術にジュウゾクした自然の世界しかみえてこなかった。

人間よって認識された自然の世界には二つの面がある。ひとつは人間の外に存在している客観的な体系としての自然、この自然の構造を解こうとして人々はこれまで自然科学を発達させてきた。もうひとつは人間の主体とのかかわりのなかでみえてくる自然、私が釣りのなかから知ったことは、この後者の自然が確かに存在していることであつた。そしてこの後者の自然は、自然の問題ではなく人間の問題である。なぜなら、自然とかがわ人間の精神的機能がいかなるものかによつて、それは、みえも隠れもするものだからである。

自然はひとつに客観的に存在するものであるとともに、第二に人間の主体との関係において存在しているものである。「主体の自然は物体と空虚とである」というエピクロスの表現はそのことをあらわしている。(とすると) F) が問題にしなければならぬものは、まずこの人間の主体との関係において存在している自然の問題などではなかつたか。そしてそのことを考察するには、自然と人間との関係とは何かを、そこでの主体とは何かを問わなければならないはずなのである。そのことよってエピクロスが「空虚」と表現した自然を現実的世界のなかで検討しなければならぬのである。

注 エピクロス (紀元前三四一〜二七〇) 古代ギリシヤ、ヘレニズム期の哲学者。
(内山節「自然と人間の哲学」)

問一 傍線部ア〜オのカタカナを漢字に改めなさい。

問二 (A) から (E) に入る適当な語句を次の中から選び、記号で答えなさい。同じ記号は二回使用できないものとします。

ア だから イ そして ウ だが エ とすると オ もちろん

問三 傍線部①「そのひとつは……である」について、ア「そのひとつ」イ「もうひとつ」と表現されている「自然」はどのようなものですか。それぞれ本文の十八行目までの中から二十五字以内で抜き出しなさい。

問四 傍線部②「私は……日があつた。」について次の間に答えなさい。

1 「息苦しさを感ぜた」のはなぜですか。本文中の語句をもとにして五十文字以内で説明しなさい。

2 またそこから解放された時、筆者は釣りについて具体的にどのようなことを理解しましたか。該当する一文の最初の五字を抜き出しなさい。

問五 傍線部③「小宇宙」と同じ意味を持つ語句を本文中から十字以内で抜き出しなさい。

問六 傍線部④「自然とかがわる人間の精神的機能」とはどのような「機能」のことですか。「マニュアル」という語を必ず使って五十文字以内で説明しなさい。

問七 (F) に入る適当な四字の熟語を本文中から抜き出しなさい。

○問題二 次の文章を読んで後の間に答えなさい(ただし、文章は一部改変してあります)。

英国のサセックス州、丘陵地帯の森の中を長く緩やかに下り続ける道の、急に開けて日当たりが良くなるカーブの端に、□□堂々とした一本の木があつた。季節は五月。白いヒヤシンス型の花が鮮やかな緑の葉の上に無数に鎮座しているような、思わず目を奪われるその華やかさのせいで、どこへ行つても同じ種類のものが目に付いた。いや、華やか、というのはこの木には似つかわしくない形容だ。強いて言うなら教会建築を思わせる荘厳さ、といった印象なのだが、それも花木のたとえとしてふさわしいものかどうか分らない。周囲の状況さえ許せばとつともなく大きくなる木らしく、その森の端で見つけた大木はまるでセコピアのような、風情だつた。嘩然として車を止め、見とれた。車の流れが止むと、辺りがしんとし、森の方から誘うような鳥の音が響いてくる。素早く辺りを見回し人の目がないのを確かめてから、木肌に触り抱きつかせてもらった。

それから、恋に落ちたようにしばらくその木のこと頭から離れず、あるとき台所仕事をしながら、あ、と思

つた。あれは、もしかしたらマロニエではないか。

実はすでにその木の素性についてある程度は調べてあつた。どの国に行つても機会があれば草木の図鑑を買うことにしている。日本名では〇〇の仲間、と察しがついていても現地でも何と呼ばれているのか知りたい。英国は幾度か来ているので、重くても同じ図鑑をもってゆく。その木が英国でホース・チェスナツツと呼ばれているものだということは、だからすでに知っていた。ただ、何かもう一つすっかり分かり切つていないような「フゼン」感が常につきまとつていて、専門分野でないものを調べるときに常である。

もう一度図鑑を引いてよく読む。確かにヨーロッパではマロニエ、と呼ばれているらしい。街路樹に仕立てられると彼らはそんなに大きくなれないのだろう。それで英国で、ノボウズに伸びきつたそれと同じ種類とは思えなかつたのだ。それにしてもホース・チェスナツツ、馬栗だなんて。乱暴なネーミングに少し顔をしかめる。

それから誰に会つてもしばらくはホース・チェスナツツのことを話題にする(なにせ、ほとんど「恋に落ちて」いるから)。調べられそうなお本を見かけると必ず目を通す。そのうちにだんだん彼の木に關しての情報が集まつてくる。どうやらその栗の実に見立てられている大きな実は、子供たちのトラディショナルな遊び道具として伝わっていたらしい。そこに行き着いたときはもう、嬉しくてたまらない。こういうことに、ものすごく惹きつけられるたちなのだ。

さつそく知り合いの男の子を捕まえて(自分がとつて食わんばかりの勢いになっているのを、意識的に制しつつ)、教えてもらう。どういう実を選ぶか、作り方、遊ぶときの駆け引きの様子、等々、微に入り細にわたり男の子を怖がらせないように、けれどしつこく食い下がつてメモを取る。遊び方は、その大きなアボガドの種のような種子の中央に穴をあけひもを通し、互いにおつけ合つて強度を競うというもの。「コンカーを強くするには酔につけるんだ」と彼は瞳をきらりとさせて言う。こういう、職人技の秘密、のようなことを話してくれるとき、男の子たちはなんでもいっつも「満々で誇りに満ちていることか。思わず見とれるが、でもちよつと待つて。今なんて言つた? 確か、コン……。「コンカー (Conker) だよ。ゲームの呼び名だよ」とたんに私の頭の中で小さく何かが、あ、あ、あ、とスパークする。確か、大昔、まだ小学校に入学する前、近所の英国人の男の子が、剣玉の玉に紐を付けただけのものをぶつけ合つて遊んでいた。そうか、由来はここだつたのだ。

納得が臍に落ちてゆき、点と点が繋がつてゆく悦び。

農山漁村文化協会から、各都道府県の伝統食を詳しく聞き書きするスタイルのシリーズが出ていて、身近な地方の巻から手に入れて楽しんでいる。農家や商家、武家の暮らしの営みから伝えられてきた食文化というものは興味尽きない。特に、飢餓の時代を何度も経てきて普段なら猛毒とされているものを、工夫に工夫を重ねて食せるものにしてゆく過程は、なんだか神聖なものをみるようだ。奄美大島のソテツの扱いにしても、山間部の栃の実の扱いにしても、有毒な彼岸花の鱗茎(れんけい)でさえ、人は食べられるものに変えてゆく。何でわざわざ、と思うが、それほどずさまじい飢餓があつたという歴史の跡なのだろう。

なかでも、そのままではとても食べられない栃の実を無毒化してゆく工程は、清冽な川の流れ(皮を剥いた実を何度も晒す)や静かな森の風景に、人の暮らしがとじて見え、昔からとても好きだつた。それで、栃の実をつき込んだ餅、とかが売られている特産品のコーナーに通るかかると(買いたくないのに)足をとめてしまう。しよつちゆう山歩きに行くくせに、どういふわけか、沢沿いで思う存分手足を伸ばしたトチノキには会えずにきた。

それが今年に入つて、いつものように樹木関係の資料が目についたときちらりと見たら、トチノキはマロニエの近縁種、という記述があるではないか。また頭の中で、何かが、あ、と叫び、大急ぎでトチノキの全体像を探すと、それはホース・チェスナツツそっくりに見えた(素人目に、である、もちろん)。ちなみにマロニエはセイヨウトチノキ、とある。

マロニエ↓(A) ↓コンカー↓(B) ↓栃餅……

独りよがり、乱暴なものではあるが、とりあえず地図ができあがつていく。自分の中の、違う場所に納めてあつたはずの興味が瞬間に繋がる、ぐるりがどんどん埋められてゆく、この充実感、達成感、(C)。

(梨木香歩「繋がる」)

問一 傍線部アのオの、漢字には読みを付け、カタカナは漢字に改めなさい。

問二 傍線部1、2は四字熟語です。それぞれの初めの二字を答えて、四字熟語を完成させなさい。

問三 傍線部①「恋に落ちたように」③「納得が腑に落ちてゆき」について次の間に答えなさい。

1 それぞれの比喩の種類を漢字二字で答えなさい。

2 それぞれのような状態のことを表現していますか。簡潔に答えなさい。

問四 傍線部②「ここ」とは何を指していますか。十字前後で答えなさい。

問五 傍線部④「点と点が繋がってゆく悦び」というのはどのようなことを言うのですか。その説明に該当する一文の最初の五字を抜き出さなさい。

問六 傍線部⑤「なんだか神聖なものをみるようだ」とありますが、なぜそのような気持ちになったのですか。五十字以内で説明しなさい。

問七 (A) (B) の中に入る語を本文中から抜き出して図式を完成させなさい。

問八 (C) に入る最も適当な語を次から選び、記号で答えなさい。

ア 悲壯感 イ 疎外感 ウ 爽快感 エ 飛躍感 オ 重厚感

○問題三 次の1～5の詩集は誰の作品ですか。後群の中から選び、記号で答えなさい。

1 「若菜集」 2 「春と修羅」 3 「自分の感受性くらい」 4 「二十億光年の孤独」

5 「智恵子抄」

(ア 宮沢賢治 イ 高村光太郎 ウ 茨木のり子 エ 島崎藤村 オ 谷川俊太郎)

一般入學試験〈Ⅱ期〉

○問題一 次は「美と芸術」について論じた文章の一節です。読んで後の間に答えなさい。

「生きていくからうたうんだ」という歌の文句があるが、たしかにそうにちがいない。科学も宗教も人間のやることはみな生きていなければできないが、芸術はことに生命と密接している感じがする。私たちがふとうたいたくなったり、踊りたくなったりするときには、体の奥深くからなにかが自然に込みあげてくるような気がする。生命の泉が自然にあふれるような感じである。芸術家のインスピレーションといわれるものも、このような不思議な内的衝動のことだ。「芸術は生命力の発露である」といわれるのもそのためであろう。すぐれた芸術作品は必ずいきいきとした生命感にみちている。

機械の設計図の場合には、寸法の比例が実物に正確に適合していることが肝心だが、絵の場合には寸法だけ正確ならいいというわけにはいかない。人は、科学にたいして冷静な正確さを要求するのにたいして、芸術にはあたたかい血のかよった感じをもとめる。昔、「巨勢の金剛」という名人の描いた絵の馬が屏風からぬけだして水を飲みにいっただけという話があるが、名作についてこれに似たような伝説がたくさん残っているのも、芸術といものがつねに生命と結びつけて考えられていた証拠である。文明社会の音楽よりも未開人の音楽に迫力が感じられることがあったり、原始人の絵や子供の絵に不思議な魅力があるのも、それらが素朴に生命そのものと直結しているように思えるからであろう。それにすべての芸術は肉体運動にもとづいている。大半は体を動かす訓練なしにはなりたたないものばかりである。小説だつてもとはといえば肉体運動である。血わき(A)おどる感じから離れることはできないのだ。

ところでここに一つの問題がおきる。芸術は反映だという考えと、生命力の発露だという考えは、矛盾するように思えるからである。反映はむこうからこっちへ移ってくるものだが、発露はこっちからむこうへ出ていくものである。まるで逆ではないか、いったいどっちが本当なのかと疑問がわく。昔からこの疑問をめぐってさまざまな論争がおこなわれてきた。反映だ、否、発露だ、と。今日でも芸術論上の大きな問題点になっている。芸術は外の現実を認識することなのか、それとも自分の内部生命を表現することなのか、それがしばしば議論のわかれめになる。対象が基本だ、いや主体が大切だなどというかたちで争われることもある。

しかしこういう論議は、街角でおでこを「ハチ合わせした二人の人が、お互いにおまえの方が先にぶつかったと喧嘩するのに似たところがある。つまり水掛け論におちいりやすいのである。

ここでは結論を急がずにどちらもともなところがあるだけでいいとおこう。しかし、外の現実と人間の行動が、ごつんとハチ合わせした地点に芸術が発生することだけは確かである。

もともと反映と発露は同じものだともいえる。つまりそれはハチ合わせなのだ。一見反対方向からやってくるようであるが、ハチ合わせした地点で一致してしまうのである。映るということはあらわれることである。あらわれなければ映ったとはいえないし、はつきり外に映らなければあらわれたとはいえない。

私は内部生命の表現も自然の反映現象の一種だと思う。表現は反映作用の一部といつてよいだろう。反映作用は、外部からの刺激をうけとる側面と、そのうけとった証拠を外にあらわす側面とをふくんでいる。無生物の反映作用の場合は、この二つの側面は一体となっていて、はつきりわかれていないけれども、水に映ると地面に映るのとでは像がちがうのは、むしろ水と地面のあらわし方のちがいといった方がいようにさえ思える。いずれにせよ、うけとり方とあらわれ方は対応しており、あらわれないうちは反映作用は完結したとはいえない。

動物の反映作用では、うけとりとあらわれの二側面が大きくわかれてくるといつてよいだろう。それは反映作用が体の表面ではなく、内部の頭脳でおこなわれるためである。外から刺激をうけとる。ケイロが複雑に間接化されているから、それを外にあらわすケイロも直接的ではなくなるわけである。そして入り口と出口が別々になつてしまう。意外なものを見ると、あつとさげふ、という具合に、目からうけとり口であらわしたりするのである。

この場合、見たものの姿とあつという声とは似ても似つかぬかたちであるから、二つはぜんぜん無関係のようだけれども、おどろくという意識でじつは結ばれているわけである。表現は表現行動などとよばれ、行動の一形式のようだけれども、意識をあらわすことに目的がかぎられている点で、食べたり走ったりする実践とはことなっている。あくまでも意識という反映機能に従属しているのである。表現は意識の表現だが、その意識には外のようすが映っているのだ。

熊を見ても猿を見ても犬はワンワンとほえる。そのほえ方が多少ちがう程度である。ワンワンという声は熊の姿にも猿の姿にも似ていない。熊や猿の映像は犬の意識にすぎない。だが人間の場合は、そのときはあつとさげふただけだが、あとで他の人にどんなにおどろいたかをつたえようとして、そのときのような言葉を言葉や絵やいろいろな手段で描きだす。はじめに意識にうつった熊の姿が再現されることになる。人間の表現では、表現がふたたびもとの映像に似てくるのである。(B)も発展すると映像になるということは、つまり、(C)という高度な反映作用では、像が外にあらわれるまでにたいへん手間がかかるということをもものがたっている。

意識という機能は、うけとつた刺激をいったんこなごなに原型をとどめぬまでに変型したうえで、さらにそれをもとの姿に復元的に再構築するような働きである。芸術は、こういう働きが極度に発達したものであってよいのではないか。芸術は反映でもあるし表現でもある。生きた反映なのである。生きた反映なのである。

生きた反映では、うけとつた刺激が全部あらわれるわけではない。シュシャセンタクと加工ののちにあらわれる。目に映ったものが全部意識されるわけではないから、うけとりの過程ですでに選別がおこなわれているわけだが表現過程ではさらに選別や加工で、チュウショウウされる。人間のようにもつとも意識的な動物は意識してわざわざ外にはあらわさないという場合も多くなる。

意識によるシュシャセンタクの基準は必ずしも外からの刺激の強度や大きさに依存するものではない。選別する意識の基礎となるのは生命の母体である肉体を維持する必要性であるといえる。大きな山は、犬の眼に映るが意識されない。生命の必要にもとづいて小さな食物のほうをはっきり意識するのである。針の刺激は風の強さよりも弱い圧力だが、肉体に直接危害をくわえるので「痛い」ととびあがるほどははっきり意識するのである。すべて生命の保全とシンチヨウウの必要を基本にして選択し、他の刺激をすてさる作用がすなわち意識のはじめなのだ。だから意識はまず欲望というかたちをとる。したがって、欲望はもつとも原始的な意識である。表現もまず欲望の表現からはじまる。子供の泣き声は、苦しいとかほしいとか、すべて生命欲求に直結している。

(永井潔 「美と芸術の理論」)

問一 傍線部ア〜オのカタカナを漢字に改めなさい。

問二 (A)の中に入る漢字一字を答えなさい。

問三 傍線部①「体の……気がする」とほぼ同じ内容を、別の語句で表現している部分があります。十字以内で抜き出しなさい。

問四 傍線部②「いきいきとした生命観」とはどのようなものですか。説明している部分を十五字以内で抜き出しなさい。

問五 傍線部③「芸術は……思えるからである」について、次の間に答えなさい。

1 この部分のa「芸術は反映だ」b「生命力の発露だ」はそれぞれどのように説明されていますか。それぞれ十五字以内で抜き出しなさい。

2 ここでは「矛盾するように思える」と表現していますが、筆者自身はどのように考えていますか。それを端的に表した一文の、はじめの五字を答えなさい。

問六 傍線部④「内部の頭脳」とはこの場合、何のことですか。本文中から漢字二字の熟語を抜き出しなさい。

問七 (B)(C)には、1意識 2表現 の語のどちらかが入ります。それぞれ記号で答えなさい。

問八 傍線部⑤「こういう働き」とはどういう働きのことですか。本文中の語句をもとにして五十字以内で説明しなさい。

問九 次の1〜5までの内容が本文の内容と合致する場合には○を、合致しない場合には×をつけなさい。

- 1 科学や宗教とちがって芸術は生命の力と深く結びついている。
- 2 反映作用は刺激をうけとる側面とそれを外にあらわす側面とがあるが、その二つははっきりわかれてはいない。
- 3 うけとつた刺激というものは、うけとりの過程、表現の過程で選別や加工がなされる。
- 4 外からの刺激の強度や大きさによって意識の度合いがちがうのは当然のことである。
- 5 生命にとつてはまず欲望がもつとも原始的な意識であり、そこから表現もはじまる。

○問題一 次は絵本を読むことの意義について述べた文章の一節です。読んで後の間に答えなさい(本文は一部省略しています)。

さて、いよいよ待ちに待った、山葡萄摘みの日が来ました。前日用意したカゴを持って一家は山へ向います。秋の空は、すきとおるように青く広がって、今日一日の収穫を約束しているかのようです。目ざす林は、紅葉が赤や黄色に色付いて錦の衣を身にまとい、陽射しをあびて輝いています。

紅葉と言えば数年前、北海道で見た燃えるような秋の林が今も忘れられません。数日の内に、木の葉は、シクや茜、紅や黄に染まり、林に足をふみこむと、その明るいこと。足元は、落葉で錦のじゅうたんが、しきつめられたよう。上を見上げると、抜けるような青空を背に、紅や黄色の木の葉がすきとおって、光り輝いているのです。

お父さんとお母さんは、子どもと手に手をとりながら、そんな輝く林に入ってゆくのです。小径は、やがて落葉にかくれて見えなくなりまりました。それでも敷きつめられた落葉の上を歩き、木々の間を抜け、弓なりにまがった枝の下をぐり、めざす山葡萄を探します。

やがて小さな沢を越えると、そこは、かつてお父さんが子どものころに、山葡萄を沢山摘んだ思い出の場所です。数十年たった今もその場所は、少しもかわっていない。父親は、自分の子どものころや、当時そこにつれてきてくれた祖父母のことを思い出し、亡き祖父母の声が聞こえてくるような不思議な気持ちにおそわれて、胸が熱くなるのです。

そのとき、子どもが叫びます。「あつたあつた、山葡萄を見つけた！」父親は、ふと我れにかえります。目の前には、明るい秋の林が広がっています。子どもが指さす、木のこずえを見上げると、シククの葉の中に、山葡萄の実が、房になって、ぶらさがっているのが見えるのです。

三十年前に木に登り、その実を摘んだのは自分でした。今、父親は木の下に立ち、息子に言います。

「おまえ、木に登って取ってこれるかい」

「もちろんだよ」

子どもは、身軽にするすると木に登ると、山葡萄の実をつるごと取って、再び降りてくるのです。子どもの顔は、どんなもんだいと言わんばかりに誇りに満ち、頬もほんのり赤く上気してさえているのです。

息子は、つるから実をちぎり、「はい、これお母さん」「はい、これお父さん」と分けてくれます。秋の輝く林の中で、親と子は、山葡萄を口に含みます。その味は、酸っぱい。酸っぱいけれども、おいしい。

本当に心に生きる絵本の味は、こんな味がするのです。(A)、決してお店で買った葡萄のように、甘くて食べやすくはありません。(B)、たいそう酸っぱくて、酸っぱさの中に、ほんのり甘味が感じられる。(C)、本当に心に残るのは、お店で買った葡萄の味の思い出、両親と林の中に摘みに行つて口にしたら、山葡萄の味の思い出か。

輝く秋の林の中、手をつなぎながら歩いた小径、心のこもった温かい会話、はじめて山葡萄を見つけたこと、(D)、みんなで口にした山葡萄の味の酸っぱいこと、酸っぱいけれどもおいしかったことを、子どもは一生忘れないと思います。

本当に心に残る絵本は、この山葡萄のような味がするのです。そこに描かれた絵は、まるで秋たけなわの紅葉や、ぬけるように青い秋空のように美しい。大人が見ても、子どもが見ても、きれいだなあと思うのです。そこにつづられた文章は、単なる文章ではありません。言葉です。美しい林を歩きながら、大人が子どもに心をこめて語ってあげる、そんな心のこもった言葉です。それは、時には目のさめるような紅葉に感嘆する言葉であり、山葡萄を見つけたときの歓びの声でもあります。

すばらしい世界を前に、大人の心は感動します。感動した心から語られる言葉は、子どもの心を揺りうごかします。絵本を読んであげる親の言葉は、そんな言葉であつて欲しいのです。そういう言葉こそ、子どもの心にしみとおり、一生忘れがたくなつかしい思い出となるのです。そういう言葉こそ、何十年たつても心の中で消えることなく、昨日きいたようにはっきりと、心に浮んでくるのです。

絵本が、深く心の中で生き続けるためには、もう一つ忘れてならない大切な要素があります。それは、山葡萄を摘みに行ったとき、親子が手をつないでいた、その手のぬくもりすなわち、肌と肌の触れ合いです。絵本を読んであげるとき、子どもは、大人の膝に乗ったり、肩によりかかったりするのは、大人と子どもとの触れあいの中で、絵本は、はじめてその本然の姿を見せてくれるのです。こうした、大人と子どもとして見てゆきますと、絵本は、子どもに与えるようなものではないのがわかります。美しい秋の山に、親

と子が一緒に手をとって山葡萄摘みに行ったように、絵本は、親と子が手をとって、一緒に入ってゆく世界です。そして、絵本という森の中で、共に感動するのです。

(松居友「わたしの絵本体験」)

問一 傍線部ア～エの、漢字には読みを付け、カタカナは漢字に改めなさい。

問二 傍線部①「秋の空は、すきとおるように青く広がって」③「燃えるような秋」とほぼ同じ内容の表現を本文中から、どちらも十字以内で抜き出さなさい。

問三 傍線部②の表現技法を漢字三字で答えなさい。

問四 傍線部④「輝く林」とはどのような林のことですか。具体的に説明した一文の最初の五字を抜き出さなさい。

問五 () A～Dに入る最も適当な言葉を次から選び、記号で答えなさい。

ア しかし イ そして ウ それは エ たとえば オ むしろ

問六 傍線部⑤「本当に心に残る絵本は、この山葡萄のような味がするのです」とありますが、このことを別の言葉で説明した文があります。その一文の最初の五字を抜き出さなさい。

問七 傍線部⑥「そこにつづられた文章は、単なる文章ではありません。言葉です」とありますが、それはどのような意味で「単なる文章ではない」のでしょうか。その理由を端的に説明している一文の最初の五字を抜き出さなさい。

問八 傍線部⑦「大切な要素」とは何のことですか。本文中の言葉をもとにして十五字以内で答えなさい。

問九 この文章の表現法の特徴はどのような点にあると思いますか。解答欄の書き出しに続けて六十字以内で説明しなさい。

○問題三 次の文学史上の項目に該当する文学者名を後群から選び、記号で答えなさい。

- | | | | |
|------------|------------|-----------|---------|
| 1 短歌、俳句の革新 | 2 口語自由詩の確立 | 3 近代小説の確立 | 4 評論の確立 |
| 5 短編小説の名手 | | | |
| (ア 芥川龍之介 | イ 夏目漱石 | ウ 正岡子規 | エ 小林秀雄 |
| | オ 萩原朔太郎 | | |